

じいじのピアノ

小一・深谷 馨音

わたしには、じいじがいない。二さいのときに、びょうきでしんでしまった。

でも、やさしいかおやこえは、よくおぼえている。ときどき、とてもあいたくなる。

じいじがプレゼントしてくれたくじらのぬいぐるみは、わたしのたからもの。まいばん、だきしめながらねる。そうすると、じいじにあえるようなきがするから。

「なつやすみ、おぼんになると、じいじがかえってくるよ。」

と、ばあばはいう。だけど、この四ねんかん、いちどだって、かえってきたのをみたことがない。(なぜだろう?)わたしは、いつもおもっていた。

そして、ことしもおぼんがやってきた。

わたしは、いつものように、ピアノをひいていた。

このピアノは、じいじがママにくれて、ママがわたしにくれたもの。ママのはなしによると、じいじも、よくピアノをひいていたらしい。

「わたしがピアノをすきなのは、じいじのおかげよ!じいじが、うつくしいきよくを、たくさんおしえてくれたのよ。」

と、ママはいつていた。(わたしもうつくしいきよくをひけるようになりたいな。)そうおもいながらひいていると、とつぜん、ふしぎな

ことがおこった。

いきなり、ピアノのけんぼんがはずれて、ちゅうにうきはじめたのだ。そして、けんぼんがまどをぬけて、そらたかくうきはじめた。わたしは、おもわずけんぼんのうえにのっていた。

のるたびにおとがなるので、たのしくなったわたしは、どんどのぼっていった。けんぼんのかいだんは、どんどんつづいていく。したをみると、わたしのいえは、もうみえなくなっていた。(どうしよう。)とおもいながらも、わたしはのぼっていく。

とうとう、くもをつきぬけていた。ふしぎなことに、わたしがのっていたけんぼんは、くものうえのピアノのけんぼんとつながっていた。

そこでピアノをひいていたのは、な、なんと、じいじだったのだ！
じいじは、にっこりわらいながら、

「むかえにきてくれたのかい。ありがとうねえ。」
といった。わたしはおもわずうなづいて、

「いっしょにきてくれる？」
と、いつていた。

「ちよつとだけだがねえ。」

じいじはそういつて、わたしとてをつないでくれた。

それから、わたしたちは、けんぼんのかいだんをおりながら、いままであったことをはなした。いもうとがうまれたこと、しょうがくせいになったこと、いろいろはなした。はなしているうちに、いえについてしまった。

それから、わたしたちは、みんなでパーティーをした。わたしはじいじといっしょにピアノをひいて、いもうとはおきまりのダンスをした。ママもじいじとピアノをひいて、とつてもうれしそう。た



のしいパーティーだった。はしやぎすぎてつかれたわたしは、しらないうちにねてしまったらしい。くじらのぬいぐるみをだいて。じいじがどうやってかえっていったのかは、わからない。こんどは、ママがおくっていったのかな。そうだといい。ママもずっとじいじにあいたがっていたから。

じいじのピアノってすごい。わたしは、これからも、じいじのピアノをひきつづけるぞ。そうしたら、きっとまたあえるよね、じいじ。

画：杉田比呂美